

東北 VALUE SIGHT 秋田



NPO法人秋田内陸線沿線地域エコミュージアム会議 事務局
くまのたいら企画 代表

大穂 耕一郎 (おおほ・こういちろう)

1954年 東京都文京区生まれ
1972年 秋田大学教育学部入学
1976年から東京都八王子市などで小学校教員
2003年から秋田内陸縦貫鉄道の存続運動にかかわる
2010年6月 秋田内陸線沿線地域エコミュージアム会議に参加
2011年4月 秋田県北秋田市阿仁に転居
2012年4月 くまのたいら企画設立
NPO法人秋田内陸線沿線地域エコミュージアム会議
TEL・FAX 0186-84-2120

「秋田内陸線沿線地域エコミュージアム」は、仙北市と北秋田市の2市にまたがる秋田内陸線の存続にとどまらず、同線を軸に沿線地域の活性化に取り組んでいるNPOである。その事業は「人と人を横に結ぶ」ことであり、「どれだけ横糸を張り巡らせることができるか」が地域活性化の鍵だという。

赤字ローカル線を 地域活性化の軸に

2010年6月13日、「秋田内陸線沿線地域エコミュージアム会議」の設立総会が、秋田内陸線比立内駅近くの北秋田市農村生活改善センターで開催された。総会には来賓として地元の北秋田市、仙北市をはじめ、秋田県、国土交通省、秋田内陸縦貫鉄道などの関係者が参加し、ニュースでも大きく取り上げられた。

この「エコミュージアム会議」は、経営再建過程にある秋田内陸縦貫鉄道（鷹巣一角館間94.2km）を応援するための民間レベルの団体結成、とイメージされたのだが、立ち位置は「応援団」とは半歩異なっている。

目的は沿線地域の活性化

「エコミュージアム会議」の定款には、目的が次のように記されている。

「この法人は、秋田内陸線沿線地域に対して、地域づくり等に関する事業を行い、沿線地域の活力向上に寄与し、秋田内陸線利用促進を図ることを目的とする。」

「エコミュージアム会議」は、秋田内陸線の存続を目的にするのではなく、沿線地域の活性化が目的であり、そのための重要なアイテムとして秋田内陸線という鉄道を位置付けている。だからもちろん、鉄道の利用促進も図る。

この考え方は、「エコミュージアム会議」より以前に結成された地元の団体「秋田内陸線の存続を考える会」(北秋田市阿仁)、「秋田内陸縦貫鉄道を守る会」(仙北市上松木内)にも浸透している。北秋田市鷹巣地区を基盤とした「秋田内陸線エリアネットワーク」

は、2007年の設立当初から、「内陸線を活用して地域活性化を図る」ことを目的としている。

観光資源の掘り起こし

「エコミュージアム」とは、地域の自然資源、人文資源を掘り起こし、地域全体を「博物館」として、地域外からの観光客を呼び込もうという、地域振興の一つの形態である。

そのため、「エコミュージアム会議」では、地元の教育委員会、自治会、商工会などに働きかけて、フィールドワークをこまめに実施し、年1回フォーラムを開くなどの活動を行ってきた。その結果、いくつもの「地域の宝」を発掘、フットパス(注1)のための地図を沿線の拠点駅ごとに作成している。

「くまのたいら企画」の設立

私は、東京都在住だった2003年から秋田内陸線の存続運動にかかわり、「エコミュージアム会議」にも設立当初から参加している。2011年4月に秋田内陸線比立内駅近くに転居し、1年間、市の臨時職員(比立内駅のスタッフ)を務めた後、2012年4月に、旅行業・企画業を営む個人事務所「くまのたいら企画」を設立した。「個人」と言っても、私を含む5人の仲間ですまざまな事業を進めている。

旅行業(秋田県知事登録第3種旅行業)を始めたのは、「エコミュージアム会議」が掘り起こした観光資源を使って実際に着地型観光ツアーを行うためだ。旅行企画を立てて一般募集をするには旅行業資格が必要なので、東京在住時に資格を取り、昨年、全国

旅行業協会に入会して開業に至った。

「くまのたいら企画」の事業目的も、「秋田内陸線沿線地域の活性化」であり、非営利事業はNPOの「エコミュージアム会議」で、営利事業は「くまのたいら企画」で、という相互関係にある。現在までに、ツアー企画・催行の他、秋田内陸線の車内広告代理営業、秋田内陸線グッズの開発・販売、秋田内陸線の駅弁開発、沿線宿泊施設のインターネット予約代行システムの構築などを進めている。「鉄道を利用した地域活性化」を小さいながら実践しているのだ。

人と人を結ぶ仕事

私たちが取り組んでいる「エコミュージアム会議」の活動も「くまのたいら企画」の事業も、秋田内陸線にかかわる人と人を横に結ぶ仕事だ。クモの糸も、縦糸ではなく横糸に粘着力があるのだが、地



2013年1月10日に開催した「秋田内陸線と地域のかかわりを考えるフォーラム」では、千葉県のいすみ鉄道株式会社、山形県の山形鉄道株式会社の2人の社長を迎えて、地域と鉄道の関係話し合った。

域活性化の鍵は、どれだけ横糸を張り巡らすかにあると思っている。

秋田内陸線に協力したいが乗る機会がないという人でも、グッズを買ったり車内広告を出すことで協力ができる。インターネットを介して、宿泊客の減少に悩む旅館と、旅行に来たいのに旅館が見つからない観光客を結びつけることができる。

つながるのは私たちと他の人との間だけではない。私たちとつながった人たち同士が横につながることによって、地域に網の目のような連携が生まれる。私たちの仕事は、小さいけれど無数の可能性を秘めた仕事なのだ考えると、忙しさが楽しさになる。

でも、仕事がかかると増えて、実は大変。現在、仲間を募集中である。

地域と鉄道会社の連携を

第三セクター鉄道である秋田内陸縦貫鉄道株式会社には、沿線地域をレールという軸で結びつけるという「地域密着型」の役割があるはずだが、これまで、会社と地域住民とのコミュニケーションが十分に取れてこなかった。2012年度の「赤字2億円以内」の目標は何とか達成できた今、今後の課題は「地域と鉄道会社の連携」である。

同社には課題がたくさん残されている。今後は、「地域に愛される鉄道会社」となるよう、地域の力で会社を包み込んでいきたいと思う。これが、私たちの「人と人を結ぶ」、今後の大きな仕事である。

(注1) イギリスを発祥とする“森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径(こみち)【Path】のこと(日本フットパス協会ホームページより)